

# 『享楽主義者マリウス』に描かれた 「宗教の第四局面」とカントの宗教哲学\*

佐藤 牧子

## 序論

ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839–1894) が『享楽主義者マリウス』(1885、以後『マリウス』と表記)を通して「近代精神に可能な宗教のいわゆる第四局面を提示したい」(*LWP* 52)とヴァイオレット・パジェット (Violet Paget, 1856–1935)宛の手紙に記した事はよく知られている。この第四局面とは、1883年5月に『コンテンポラリーレビュー』に発表された「不信仰にともなう責任」と題するパジェットの論文を念頭に、発せられた言葉なのであるが、その「第四局面」の内容に関しては様々な論がある。拙論『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』もその「第四局面」を明らかにしようと試みたものの一つである。本論文は、カントの宗教哲学を援用することによって、前の論文を補強する形で執筆されたものである。そのため、一部、前の論文と重複する箇所があることを前置きとして記しておきたい。

## 1

「コールリッジの著作」(1866)というエッセイの中でペイターは、カント (Immanuel Kant, 1724–1804)が行った「思弁的理性」と「実践理性」の区別に触れている。そして、カントが『純粋理性批判』(第一版 1781, 第二版 1787)の弁証論において「思弁的理性」を批判した意図は「有神論の合理的な基盤を破壊する事にある」としている (*WP* 555)。ここでペイター

が言わんとしていることを理解するには、カントが『純粋理性批判』において追求しようとした内容について確認する必要がある。

カントが『純粋理性批判』で試みたのは、人間が神の視点を持ち込まずに、自分自身の力で何を認識しうるかについて人間の認識機能を整理し直し、その限界を明らかにすることであった。その帰結は、私たちが認識できる世界は私たちの経験的な世界である現象界に限られており、その現象界に位置しない物自体(対象そのもの)、については認識する事はできないというものであった。つまり、「神」が存在するのかどうか、世界とは何か、「魂の不死」が可能であるのかどうか、といった問いに対して理性は答える事ができないとカントは結論づけたのである。

このようにしてカントは「有神論の合理的な基盤を破壊」した。しかし、カントがこのようなことをしたのは、神の存在を無視、あるいは否定するためではなかった。カントは、『純粋理性批判』で、次のように述べている。「たとえ形而上学[カントが『純粋理性批判』で展開するカント自身の哲学]は宗教の土台ではありえないとしても、やはりいつでも宗教の堡壘として存続しなければならない」。そして、「形而上学」は「無法則な思弁的理性が、道徳ならびに宗教においてきっと引き起こすであろう荒廃を防ぐ」のであると語っている(B 877f.)。さらに『純粋理性批判』第二版序文でも「この批判によって、一般に害を及ぼしうるような、唯物論、宿命論、無神論、自由思想的な無信仰、狂信、迷信といったものだけではなく、専門学派にとって危険だが、公衆に入り込むのが困難なたぐいの、観念論や懐疑論といったものも、根こそぎにされることができると宣言している(BXXXIV)。以上の記述から分かるように、カントが『純粋理性批判』にて「思弁的理性」による神の存在証明が不可能である事を明らかにしたのは、「宗教の堡壘」として、宗教に荒廃を及ぼすもの、そして宗教に敵対するあるいは宗教を歪める思想を「根こそぎ」にするためだったのである。

それでは、カントはどのような形で宗教と神の存在を肯定したのであるうか。ペイターはそれを自分の言葉で説明せずに、ハインリヒ・ハイネ

(Heinrich Heine, 1797-1856) の『ドイツにおける宗教と哲学の歴史』(1834) から引用した言葉を用いて次のように説明している。「カントは理論理性と実践理性とを区別し、実践理性を魔法の杖として、理論理性が殺害した理神論の死体を生き返らせるのである」(WP 556)。この言葉は、「思弁的理性」の使用によって「神」の存在を認識することが不可能であることを立証したカントが、「実践理性」を使用して「信じる」という形でその存在を確信することができるとしたことを指している。この確信は、カント自身が念を押しているように、「論理的確実性」からではなく「道徳的確実性」からきているのである(B 856f.)。それでは、この道徳的信仰に対するカントの信念が表明されている部分を引用してみたい。

道徳的信仰にかんしては、事情はまったく異なる。と言うのは、ここでは、あることが生起しなければならないということ、すなわち私が道徳法則にあらゆる点で従うということは、端的に必然的であるからである。この目的は、ここでは免れようもなく確立している。また、この目的をすべての目的全体と結びつけ、それによって実践的妥当性を得させる条件は、私が洞察する限りでは、ただ一つしか可能ではない。すなわち、神と来世が存在する、という条件である。私はまた、道徳法則の下で諸目的のこうした統一へと導くこれ以外の条件をだれひとり知っていないということも、まったく確実視している。ところでこの道徳的指令は、同時に私の格率でもあるから(私の格率がそうであるべきことを理性が命令するように)、私は不可避免的に神の現存在と来世とを信じるであろう。そして私は、なにもものこの信仰を動揺させることはできない、と確信する。と言うのは、もしこの信仰が動揺すれば、私の道徳的原則そのものが覆されるであろうからであり、この道徳的原則を放棄することなど、私の眼には厭うべきことであり、わたしにはできないのである。(B 856)

ここで、「道徳法則」に従うことは「端的に必然的である」として私に「道徳法則」を行うように命ずるのは「実践理性」と呼ばれる理性である。また、カントによれば「道徳法則」に従う妥当性を保証するのは、神と来世

が存在する、という条件しかない。

ところで、なぜ神と来世が存在するという条件しかないのであろうか。このことを理解するには、もう少し説明が必要である。カントは『論理学』において四つの問いを提示している。それは「私は何を知ることができるか」、「私は何をなすべきか」、「私は何を希望することが許されるか」、「人間とは何か」の四つであるが、ここで問題になるのは三番目の「私は何を希望することができるか」という問いである。カントは「希望」とは幸福を目指すものであるとしている。そして、幸福を目指す方法として二つの方法を提示している。一つは、幸福を行為の直接の「動因」として幸福を追い求める方法。もう一つは、「幸福であるに値すること」を行為の動因とし、幸福になるという方法である。一つ目の方法において理性が与えるのは「われわれのあらゆる傾向性を満足させる」ために、われわれが本来持っている欲求や経験に基づいて与えられる実用的な法則であり、二つ目の方法において理性が与えるのは「ただ幸福に値するようになることだけのために、いかにわれわれは振る舞うべきかを命令する」法則である。ここで明らかになるのは、前者の法則を与える理性と後者の法則を与える理性の質が異なるという点である。カントの使用した言葉を使って説明すると、前者は「感性界」の法則に従っており、後者は「感性界」から独立した「英知界」の法則に従っているということが出来る (V132)。つまり、前者の法則の源となる理性は、この世に生きる人間が普通に使用している理性であり、後者の法則の源となる理性は、われわれが「幸福に値するようになる」ためにわれわれの振る舞いを規制する理性である。カントによると、われわれが「幸福であることへの希望」を持つためには、「道徳法則に従って命令するある最高の理性」が「根底に置かれる」必要があるという (B837f)。

カント研究者、宇都宮芳明 (1931–2007) によれば、カントのいう「最高善の理想」とは「道徳的に最も完全な意志が、最高の浄福と結合し、世界における一切の幸福の原因をなしている」ということである。<sup>1</sup> ゆえに、カ

ントの「最高善の理想」をなし得ることが、われわれが「幸福に値するようになる」ためには必要であり、不可避的に「神の現存在と来世とを信じる」必要が生まれてくるのである。なぜならば、神は唯一「道徳的に最も完全な意志」を持ち、「最高の浄福（幸福）」を備えた存在であり、そのような存在が「道徳的世界の主宰者であること」を認めることによって、「幸福に値するようになる」希望を持つことが可能となるからである。つまり、「理性は、こうした存在者〔神〕を、われわれが来世と見なさなければならぬその英知界における生とともに、どうしても想定しなければならないのであって、もしそうでなければ、道徳法則は空虚な幻影と見なさなければならぬことを知る」のである（B838f.）。このようにして、カントは「実践理性を魔法の杖として、理論理性が殺害した理神論の死体を生き返らせる」のである（WP 25）。

以上の説明から、カントが神をどのように捉えていたのか、実践理性と神との関係が分かってもらえたのではないかと思う。そこで次は、カントの宗教観を探ってみたい。カントには『たんなる理性の限界内における宗教』（1793）という宗教を主題とした著書がある。カントはこの著書を神学者シュトイドリン（Carl Friedrich Stüdtlin, 1761–1826）に贈る際に、一通の手紙を添えている。この手紙の内容はカントの宗教そしてキリスト教に対する考えを知る上で非常に重要であるため、そこからの一節を以下に引用してみたい。

純粹哲学の領域で、私に課せられていた仕事にかんして、以前から私が立てていた計画は、次の三つの課題を解決することでした。すなわち、一、私はなにを知ることができるか（形而上学）、二、私はなにをなすべきか（道徳）、三、私はなにを希望することが許されるか（宗教）。私はお送りする書物『たんなる理性の限界内における宗教』で、私の計画の第三部を完成しようと試みました。この仕事において私を導いたのは、良心を確保することと、キリスト教に対する真の尊敬とでしたが、その際またしかるべき公明正大さの原則が、つまりなにごとくも秘密にせず、私がいかにしてキリスト教と、もっとも純粹な実践理性

との可能な合一を洞察したと信じたかをあからさまに述べるという原則が、私を導いてきました。(XI 429)

以上の引用から分かることは、カントにとって宗教とは「希望」に関わることであり、またカントはキリスト教に対して「真の尊敬」を抱いていたということである。しかし、ここで見逃してはならない点は、カントが「キリスト教ともっとも純粋な実践理性との可能な合一を洞察した」と述べている点である。つまり、カントの「真の尊敬」は「もっとも純粋な実践理性」と合一するキリスト教に向けられていたといえるのである。それでは、『マリウス』の中でキリスト教はどのように扱われているのであろうか。上記に提示したカントの神の捉え方や宗教観、そして彼の批判哲学を踏まえながら、また聖書に記されたキリストの教えを参照しながら、『マリウス』に提示されたキリスト教の特質を分析してみたい。

## 2

まず、マリウスの幼少期の宗教との関わりを見ていきたい。ペイターは「ヴァインケルマン」(1867)の中で、「普遍的な異教的感情」を全ての宗教の源とみなし、また「異教的精神」をギリシアの宗教以前から存在しキリスト教世界にまで入り込んだ精神である、と説明している (*Ren.* 160)。一方で、マリウスはこの「普遍的な異教的感情」と「異教的精神」からなる「ヌマの宗教」の慣習や儀式の中に保存されている精霊の存在を感知できる、生まれながらに、本能的な信仰を持った少年として描かれている。そして、生活の様々な側面に生ける霊を感知する生活を続ける中で、「宗教的責任」を感じる青年に成長していく (*Marius.* 15)。<sup>2</sup>

この「ヌマの宗教」の他にも、マリウスの人生全体に影響を及ぼすことになった宗教体験があった。それは、エトルリアの山中にあるアスクレピオスの寺院を、病気の養生のため訪れた経験である。アスクレピオスの僧団は「異教のあらゆる宗派のうちで、おそらくキリスト教の僧団にもっと

も似ていた」とペイターが説明を加えているように、この寺院での体験は、後にマリウスがキリスト教へと導かれるための、重要な布石の一つとなっている (*Marius. I 28*)。マリウスはこの寺院で若い僧侶から、彼にとって人生を決定する力はあるのだから、「つとめて見る力を発達させなければならぬ」と言われる。これは『天から下った花嫁のように』『新しい都』が地上にあらわれる時に見ることのできるあるヴィジョン、訓練された目には見ることを許されるヴィジョンを見るためである (*Marius. I 32*)。この「新しい都」は啓示録に記される「聖なる都、新しいエルサレム」を暗示しており、このヴィジョンを見るために、マリウスは生涯をかけて(心の目で) 見る力を発達させるのである。<sup>3</sup>

ところで、生活の様々な側面に生ける霊を感知し、神々の要求に応えようとするマリウスの姿勢は、カントの定義する「宗教」に沿うものであるといえるであろう。なぜならば、カントは『たんなる理性の限界内における宗教』において「宗教は(主観的に見れば) われわれのすべての義務を神的命令として認めることである」と定義づけており (VI 153)、<sup>4</sup> 『実践理性批判』と『判断力批判』でも同様の発言をしているからである (V 129, V 481)。したがって、上記の記述からマリウスはカントの認める「宗教」を担う素養を持った青年へと育ちつつあることが分かるのである。

それでは、ここで今後の分析の指針ともなるカントが「宗教」に与えた規定を『実践理性批判』の中から引用してみたい。

こうして道徳法則は、純粹実践理性の客観であり究極目的である最高善の概念を通じて、宗教へと、すなわちあらゆる義務を制裁規定としてではなく、神的な命令として認めることへと、つまりある他者の意志の随意的な、それ自身偶然的な指図としてではなく、むしろおのおのの自由な意志それ自身の本質的な法則として認めることへと導くが、それでもこの法則はなお最高の存在者の命令とみなさなければならぬのであって、それと言うのも、道徳法則は最高善をわれわれの努力の対象とすることをわれわれに義務づけるが、われわれがこの最高善を希望できるのは、道徳的に完全で(神聖で慈悲深い) しかも同時に全

能な意志によってのみであり、それゆえこの意志との合致によってそれに到達することを希望できるからである。(V 129)

この規定の内容を理解するにはまず、カントの「理性信仰」を理解する必要があるであろう。なぜならば、宇都宮によれば「道徳を主題とするカントの実践哲学はすべてこの理性信仰に基づいて構築されており、「カントが純粹な宗教信仰と見るのも、この理性信仰にはかならない」からである(『カントと神』1)。「理性信仰」という言葉はもともと二義的であり。一方では「理性に対する信仰」を意味し、他方では「理性による信仰」を意味する。ここでいう「理性」は人間が遵守すべき道徳法則を立法する「純粹理性」を指しており、カントはまずこのような純粹実践理性が人間に備わっていることを信仰し、次にこの純粹実践理性によって最高善や神の存在を信仰するのである(『カントと神』2)。『実践理性批判』の「弁証論」では、神は「徳に応じて幸福を配分するものとして要請される」。徳と幸福との合致である最高善が同じ一つの神によって可能とされるには、人間が遵守すべき「普遍的必然的法則」である道徳法則の背後にも神聖な立法者としての神が存在する必要があるのである。

この宗教の規定において非常に重要な点は、「あらゆる義務を制裁規定としてではなく、神的な命令として認めること」となっている点である。つまり、神によって与えられた命令を後から義務として認めるのではなく、純粹実践理性が立法する道徳法則を神の命令として認めるのである。この順序は非常に大切である。何故ならば、初めに神の存在があり、その神の命令に従うことを義務として受け取るのであれば、それは「ある他者の意志の随意的な、それ自身偶然的な指図」に従うことになり、意志の自律やそれに基づく道徳法則の存在は認められなくなってしまう。これに対して宇都宮は多くの邪教が宗教として崇められる危険性がここから生じていることを確認した後、伝統的な啓示宗教であるキリスト教にもこのような危険性があることを指摘している。そして、カントが『たんなる理性の限界



内における宗教』において実践しようとしたことについて、次のようにコメントしている。「カントの『宗教論』は、カントによる宗教の規定を規矩とした上で、キリスト教のうちに、この規矩に合った純粋に宗教的な部分を認めると同時に、この規矩に反した不純な部分をそれから分離するという、批判の作業なのである」（『カントの啓蒙精神』187）。

このように、カントは自律的な意志に基づく道徳法則があって初めて「最高の存在者〔神〕」の存在の要請が可能となると言い、その順序を重んじることによって、自身の認める純粋な宗教信仰とそうでないものとを区別しようとしたのである。同様に、ペイターもマリウスにこの順序を取らせることによって、つまり、マリウスを神々の霊の存在を感知する力をもった少年に、純粋実践理性によって、神が彼に対して求める要求を感じ取ることのできる少年に仕立てることによって、キリスト教に含まれる純粋な信仰路線をマリウスが進むように、「もっとも純粋な実践理性」と合一するキリスト教へとマリウスが導かれるように企図していると見ることができるのである。

### 3

カントは「啓蒙とは何か」（1784）という小論の中で「啓蒙」とは「人間が自ら招いた未成年状態から抜け出すこと」であると定義づけている（VIII 35）。ここでいう「未成年状態」とは他人の指導に身を委ね、自分で思考しようとしなない状態のことを指している。『マリウス』の第二部は幼児期に育んだマリウスの「宗教的良心」が、皇帝マルクス・アウレリウスを通して示される哲学を選ぶのか、コルネリウスを通して示されるキリスト教を選ぶのか、この選択過程を描いたセクションとなっている。カントの言葉を借りれば、第二部でマリウスは、「未成年状態」から抜け出し、自分の良心によって自律的に善悪を判定し、それに従って生きることができる状態へと移行したといえるのである。それが顕著に現れているのが、マリウスが友人のコルネリウスと共に円形競技場で行われた動物を屠殺する催しに

対して断固反対の態度を示した場面であるといえよう。同時に、マリウスはこの残酷な催しを最後まで見物した皇帝アウレリウスに対しては、良心に欠け、正義の上ではマリウスよりも劣る、と判断を下すこととなる。<sup>5</sup>

またもう一つ忘れてはならない点は、コルネリウスがクリスチャンであると知らされる以前に、マリウスはコルネリウスに引き寄せられ、大きく影響を受けるようになったという点である。マリウスはコルネリウスの外見に気高さを見、内部に厳しい基準を感じとったが、第二部の段階でマリウスはまだ、コルネリウスの中にある基準がどのようなものであるのかについて、認識するには至っていない。マリウスが感じ取ったコルネリウスのもつ内部の基準とはカントの言葉を用いて表現すれば「道徳法則」であるといえるであろう。カントは自律的な意志に基づく「道徳法則」があって初めて「最高の存在者[神]」の存在の要請が可能となるとし、この順序を重んじたが、この時点でマリウスはコルネリウスが基準としていた「道徳法則」を立法する純粹実践理性が自分の内にもあることには気づいていなかったといえるのである。

#### 4

自分の内に存する道徳法則を立法する純粹実践理性の存在にマリウスが気付くのは、第四部に入る直前の章において、宿場の休憩所にあるオリーブの園に座っていた時のことである。そこで彼は自分の辿ってきた人生の旅路は遠くへ退き、今まで辿ってきた世界とは違う夢のような国で、別の人生を歩む自分の姿を見る。彼は生き生きとした感謝の念を抱き、その喜びを話す相手を探そうとして、辺りを見回さずにはいられないように感じる。それからしばらくして、彼の親しい友人以外に、常に彼のそばにいて決して彼を見捨てることのない伴侶の存在に思い至る。そしてこの伴侶があるために、彼の一目もっとも深い孤独のうちにも、豊かな慰めを見出すことができていたことに気づくのである (*Marius. II 66–67*)。彼は伴侶の存在をはっきりと認識することによって、「万物の中に生きて働いている精

神の直観」があるという認識へ、そして「合理的な理想」へと導かれることとなる。「合理的な理想」に到る過程は次のように描かれている。

彼はこのような本能的直感から、反省を重ねて、それらの直感に論理的な首尾一貫性をあたえる思想に進み、ついには我々自身と世界の生命を説明するのに必要なものとして、旧約聖書が造物主と名づけ、ギリシアの哲学者が永久理性と呼び、新約聖書が人の父と名づけた合理的理想を形づくるにいたった一ちょうど人がそばにいる友人の行動や、言葉や、表情から彼の内なる精神の理想を作り出すように。(Marius. II 68)

この引用部は、マリウスの伴侶が「旧約聖書における造物主」、「ギリシアの哲学における永久理性」、そして「新約聖書における人の父」に通ずる存在であることを示す重要な箇所である。さらに、「合理的理想」に通ずる伴侶に導かれてマリウスの意識は解放され、彼の肉体と知力に対する認識は、自己を超えたものとの関係性の中で捉えられるところまで高められる。つまり、彼によって所有されていると思われた肉体も、実は肉体の外に存在する「物質的な力の広大な組織」、つまり「大地から大空に広がる百千もの結合する流れ」によって決定されており、彼の知力も我々の外部に存在する「全時空に遍満せる知的あるいは精神的体系」によって定められている、という認識へと到るのである。そして、マリウスは「万物に生命を与える、創造的な、不朽不滅の心」が存在するとするアリストテレスの提示した仮説へと到達する (Marius. II 68–69)。

内なる伴侶の導きによって「自己の個性の硬く閉じた独房の壁」(Marius. I 146)を打ち破ることに成功したマリウスは「静かな望み」と「静かな喜び」を感じ、「新しい都」に日が射してきたかのように感じる。つまり、「新しい都」が地上にあらわれる時に見ることのできるあるヴィジョン、訓練された目には見ることが許されるヴィジョンを見る可能性が、内なる伴侶の導きによって高まったのである。この経験を境に、彼のそばを時々一緒に歩く旅人に過ぎなかった伴侶は、「片時も彼のかたわらを離れることのない

い『助力者』』となる (*Marius. II 70*)。

このマリウスの人生に絶大な影響を与えた出来事、彼が後に「彼の感覚と観念の焦点の合った」唯一の日として思い出す出来事について (*Marius. II 71*)、カント哲学に照応させながら考えてみたい。マリウスはここで「合理的理想」に通ずる伴侶の存在を認識するに至ったわけだが、この認識(カントの言葉を使えば、数学的に崇高なものの顕現)はマリウスに「彼の道徳的あるいは知的欲求のはっきりした基準」そして「彼という存在を、いやしくもこの世に送り出した力に対して、彼の魂がなさねばならない要求のはっきりした基準」をも示すこととなる。そして、彼は「彼の残りの全生涯は、その『理想』に対応するものをいわゆる現実の事物のあいだに探し、彼の現実の経験が提供するその理想のあらゆる痕跡あるいは片鱗を拾い集めることに捧げねばならないのではないだろうか」と今後の人生の課題を定めるのである (*Marius. II 71-72*)。つまり、マリウスはカントの言葉を借りれば、数学的に崇高なものの顕現を機縁として、心のうちに「超感性的使命の感情」を芽生えさせるのである(『カントと神』169)。そして、マリウスはこの時点に到達して初めて、以前は分からなかったコルネリウスの有していた基準の源を知るのである。

前述したように、コルネリウスの有していた基準とは、カントの言葉を使えば「道徳法則」ということになり、この基準の源はカントの言葉を使えば「英知的自己」ということになる。宇都宮は『カントと神』の中で「道徳法則」と人の内に存する「英知的自己」との関係を次のように説明している。「われわれが道徳法則を格率に採用するようになるためには、われわれの側での心情の変革とでもよぶべき出来事が必要であって、これはわれわれが単に感性的な存在ではなく、英知的性格をも備えているのに気づくことによって可能である。その限りで、われわれが自らの英知的性格に目覚めることと、道徳法則が神聖なものの尊敬すべきものとして立ち現れることは、相即した出来事である」(127)。要するに、「道徳法則」を自らの内的原則とするには、自らの内にある英知的性格に気づく必要があるのだ

ある。

宇都宮の説明によると、マリウスはここで「英知的性格」に目覚めた事になるが、マリウスが「英知的性格」に目覚めた事実が述べられる前に、この世の美を享受するキュレネ哲学のマリウスの受容に関して再考する章が設けられているのは意義深い。<sup>6</sup> 何故ならば、カントは「美しいものに自由な適意を感じる事ができる」ことのうちに「感性的自己」<sup>7</sup> から「英知的自己」への移行の可能性が示されると考えたからである(143)。<sup>8</sup>

### 結論

最後に、マリウスが目標とした「新しい都」とカントが『人倫の形而上学の基礎づけ』(1797)において「目的の国」と呼ぶものとの関連について考えてみたい。カントがいう「目的の国」とは、人間が、実現すべき目的そのもの、またその手段となって互いに尊重し、協力し合う自律的な共同体のことを指す。人間が実現すべき目的そのものとなるとは、神が人間を創造した究極の目的、つまり、人間が「感性的自己」から「英知的自己」への移行を完了した「道徳法則」の主体となることを意味し、また手段となるとは人間が互いに「道徳法則」の主体となるよう、お互いに尊重し、協力し合うことを指している。したがって、この「目的の国」はカントの神に対する信仰と分ちがたく結びついていたといえるのである(『カントと神』316)。

一方、マリウスが見ることを目標とした「新しい都」が地上にあらわれる時に見ることのできるヴィジョンを見る為には、「訓練された目」が必要であった。そして、「訓練された目」を持つ為には、心を白く清らかに保つことによって、そこに神が共に住まう幕屋を作ることが必要であった。<sup>9</sup> カントの「目的の国」もマリウスが見ることを目標とした「新しい都」も神に対する信仰が無ければ認識できないものである。しかし、カントの信じた神は宇都宮も強調しているように、キリスト教の神を原型としているにしても、人類全体に開かれた神であり、一切排他性を退ける神であった

(『カントと神』317)。同様に、マリウスが見ることを目標とした「新しい都」も聖書に記述された「新しいエルサレム」を思い起こさせるが、その目標をマリウスが与えられるのは、「キリスト教の聖職者におそらく最も似ていた」異教の僧団の僧侶からである。このようにペイターが設定したところにペイターが『マリウス』に託した宗教観が表れているといえるであろう。この事実は、カントの信じた神が人類全体に開かれた神であったように、マリウスが信じた神も人類全体に開かれた神であったという事を示唆しているからである。別言すれば、カントもペイターも純粋なキリスト教には、人類全体に開かれた要素がある事を認識し、その点を重んじたといえるのである。

## 注

\* 本論文は武庫川女子大学に提出された博士論文の一部と日本ペイター協会第54回年次大会(2015年)にて口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

1 『カントと神』(83-106)を参照。

2 詳しくは拙論『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』(1-4)を参照。

3 「エベソ人への手紙」1章18節には心の目が開かれることについて、次のように書かれている。「あなたがたの心の目が照らされ、神の召しの望みがどのようなものであるかを、あなたがたが知るように、また聖徒たちの中にある神の恵みの栄光が、どれほど豊富であるかを知るように。」詳しくは拙論『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』(4-6)を参照。

4 この定義に対して「この〔宗教の〕定義によって宗教一般の概念についての多くの誤解が防止される」という注が付されている。

5 第二部の詳しい分析は拙論『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』(7-10)に記した為、ここでは割愛した。

6 ペイターは『マリウス』の中でキュレネ哲学を次のように説明している。「それ〔キュレネ哲学〕は経験の一面、この場合、この世の美しさとそれを享受する命の短さという真理に限られた、それゆえにかえって生き生きした認識にもとづく主観的な、かたよった理想の一つであって、これを主張するのは青年の使命である」(III: 15)。

7 快適なものだけに適意(快)を感じ、それを追求する自己のこと(『カントと神』143)。

8 この事に関する詳しい説明は『カントと神』140-160を参照。

9 この事に関する詳しい説明は拙論『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』を参照。

テキストについて

本論文で使用したカントのテキストは、アカデミー版カント全集であり、カントからの引用個所の指示は、アカデミー版カント全集の巻数（ローマ数字で示す）と頁数による。なお『純粹理性批判』に関しては、慣例に従い、第一版をA、第二版をBで示し、その次に頁数を示している。なお翻訳は『純粹理性批判（上）（下）』（宇都宮芳明訳、以文社、2004年）『判断力批判 新装版（上）（下）』（宇都宮芳明訳、以文社、2004年）『実践理性批判』（宇都宮芳明監訳、以文社、2007年）を使用した。シュトイドリンへの手紙の翻訳は『カントの啓蒙精神』（pp. 162–63）を使用した。

本論文で使用したペイターのテキストの訳は適宜変更させていただいた箇所もあるが、『ウォルター・ペイター全集』（筑摩書房）を使用した。

本論文で使用したテキストは、以下のように略した。

Marius. I	Vol.1 of <i>Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas</i>
Marius. II	Vol.2 of <i>Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas</i>
Ren.	<i>The Renaissance: Studies in Art and Poetry</i>
WP	<i>Walter Pater: Essays on Literature and Art</i>
LWP	<i>Letters of Walter Pater</i>

参考文献

- The Holy Bible. King James Version. New York: American Bible Society, 1991.
- Micheli, Giuseppe, and Rene Wellek. *Reception of Kant's thought in England 1785–1805 and Immanuel Kant in England 1793–1838*. 1931; Routledge: London, 1993.
- Pater, Walter. “Coleridge’s Writings” *Walter Pater: Essays on Literature and Art*. 1973; Ed. Jennifer Uglow. London: Everyman’s Library, 1990. 1–30.
- . *Letters of Walter Pater*. Ed. Lawrence Evans. Oxford: Clarendon, 1970.
- . *Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas*. Library. Ed. 2 vols. London: Macmillan, 1910.
- . *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*. Ed. Donald L. Hill. 4<sup>th</sup> ed. London: U of California P, 1893.
- Reardon, Bernard M. G. *Religious Thought in the Victorian Age: A Survey from Coleridge to Gore*. 1971; London: Longman, 1980.
- Zemka, Sue. *Victorian Testaments: The Bible, Christology and Literary Authority in Early-Nineteen-Century British Culture*. Stanford: Stanford UP, 1997.
- 石川文康『カントはこう考えた——人はなぜ「なぜ」と問うのか』筑摩書房、1998年。
- 上村仁司「S. T. コールリッジの『政治家必携の書』における理性と宗教」『北海学園大学学園論集』第119号、2004年、83–111。
- 宇都宮芳明『カントと神』岩波書店、1998年。
- 『カントの啓蒙精神』岩波書店、2006年。
- 熊野純彦『カント』NHK出版、2002年。

46 佐藤牧子

小嶋潤『西洋思想史上のキリスト教』刀水書房、1992年.

佐藤牧子「『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教」日本ペイター協会『ペイター論集』第5号、2009年、1-19.

塚田理『イングランドの宗教——アングリカニズムの歴史とその特質』教文館、2006年.

前川祐一『ウォルター・ペイター——精神のダンディズム』研究社、1996年.

『聖書』日本聖書協会、1986年.

ティリッヒ『キリスト教思想史』佐藤敏夫訳、白水社、1997年.

フーコー、ミシェル「カントについての講義」『ミシェル・フーコー思考集成 X』172-84.

——.「啓蒙とは何か」『ミシェル・フーコー思考集成 X』3-25.

——.『ミシェル・フーコー思考集成 X』蓮實重彦他監修、筑摩書房、2002年.